



今と未来を見据えた 日本の小学校教育の充実のために

福井県小学校長会

会長 勝 木 孝 一

「今、強くなる稽古と、3年先に強くなる稽古と、両方をしなくちゃならない」

これは、昭和の大横綱・千代の富士関が、生前に残した言葉です。横綱は、若い頃から肩が脱臼しやすいという弱点を抱えながらも、厳しい筋力トレーニングと相撲の工夫を重ね、その弱点を大きな強みへと変えていきました。この言葉には、「今」と「未来」の両方を見据えて行動することの大切さが示されているように感じます。

福井県小学校長会は、昭和24年の結成以来、その時代ごとの教育課題に真摯に向き合い、多くの成果を積み重ねてまいりました。特に、授業改善や授業研究を通じた教員の資質・能力の向上は、本県の子どもたちの学力や体力の向上、望ましい生活習慣の定着にも大きく寄与してきたものと考えております。こうした先人の努力によって築かれてきた豊かな教育環境は、私たち校長会の大きな誇りでもあります。

一方、今日の社会は、国際情勢の不安定化、自然災害の激甚化、生成AIによる情報の混乱、多様な価値観の広がりなど、先行きが見通しにくいVUCAの時代を迎えています。学校現場においても、教員不足への対応、多様な児童への支援、いじめや不登校への対応、保護者・地域との連携、さらには教職員の「働きやすさ」と「働きがい」の両立など、多くの課題に向き合わなければなりません。

このような時代だからこそ、私たち校長には、日々の学校運営に全力を尽くすとともに、福井県、さらには日本の教育の未来を見据え、次の世代へ継承していく責務があります。

本県の教育に関する大綱には「個性を発揮し、自らが思い描く人生を切り拓くために挑戦し続ける人」「多様な人々を認め、協働して新たな価値を生み出す人」「ふるさとや自然を愛し、社会や地域に貢献する人」の育成が掲げられています。私たち校長は、この理念の実現に向け、子どもを主役とした「夢と希望」「ふくい愛」を育む教育を推進するとともに、教職員が安心して教育に専念できる環境づくりにも努めていかなければなりません。また、今後示される中央教育審議会の最終答申を受けて、次期学習指導要領改訂に向けた準備も始める必要があります。

そのため、福井県小学校長会は、校長同士が支え合い、励まし合い、共に学び合う組織として、情報や実践を共有しながら、時代に対応した学校経営に取り組むとともに、各市町校長会、東海・北陸地区連小、全連小、教育委員会をはじめ関係機関との連携を深めることで、本県小学校教育のさらなる充実と発展につなげてまいります。

また、本年度は、10月に第61回東海北陸地区連合小学校長会教育研究福井大会を開催いたします。県外から多くの校長をお迎えし、県内174名の校長が力を結集して大会運営に取り組み、実り多い研究大会となるよう努めてまいります。

最後に、会員をはじめ関係の皆様には心より感謝申し上げますとともに、福井県小学校長会の活動に対し、なお一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

第78回福井県小学校長学校運営研究大会 奥越大会

教育長祝辞

福井県教育長 藤丸 伸 和 氏



令和8年度福井県小学校長学校運営研究大会奥越大会が、こうして盛大に開催されますことを心からお祝い申し上げます。勝木会長をはじめ、本日お集まりの小学校長会の皆様には、日頃から本県の教育力向上のために、多大なるご尽力を賜っておりますことに、厚く御礼申し上げます。

私は就任以来、県内の小学校への学校訪問や、さまざまな行事に参加する機会をいただいてまいりましたが、学校訪問の場においても、またプレゼンテーション大会やふるさと学びフェアにおいても、のびのびと、そして自信をもって発表する子どもたちの姿が大変印象に残っております。主体的に学び、その成果をしっかりと他者に伝えようとする姿勢は、まさに皆様が取り組んでこられた学校教育の確かな成果であり、こうした積み重ねが、ふくいのもっと明るい未来を形づくっているものと感じています。皆様のご努力に改めて感謝申し上げます。

その上で本日は、「教職員と子どものウェルビーイング向上」の観点から2点申し上げたいと思います。

昨年度の教職員WEBアンケートでは、「日々の仕事に喜びや楽しさを感じている」と回答した教職員の割合は75.6%と前年比2.5ポイントの増となりました。中でもその割合は、小学校が最も高いという結果となっており、これは、子どもたちの成長や変化を日々感じることができる小学校教育の魅力や意義が、現場の先生方にしっかりと届いている証ではないかと受け止めております。

教職員のウェルビーイングをさらに高めるためには、「働きやすさ」の一層の向上が必要です。その一つとして、男性教員の育休取得促進をお願いしておりますが、昨年度は取得率が約8割と大幅に増加しました。これもひとえに、学校現場における理解の広がりや、管理職の皆様の後押しの成果であると思います。

一方で課題となっていた代替教員の確保につきましては、県では、昨年度から配置を始めた「産育代替専門職」について、今年度は、正規職員48名へと大幅に拡充し、年度当初より全17市町に配置したところです。こうした措置も活用し、周囲への気兼ねなどから迷っている男性教員にも積極的に声をかけいただき、「誰もが当たり前に関家事・子育てをする福井県」に変えていけるよう、ご理解・ご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

また、3月末には福井弁護士会と協定を結び、保護者対応にかかる支援体制を強化しました。従来の相談対応

に加え、困難事案については弁護士による「代理対応」も可能とする仕組みです。困ったときには弁護士を頼れる、最終的には弁護士に任せることもできるという安心感を持っていただくことで、現場の先生方の負担軽減を図りたいとの思いで制度化しましたので、どうか遠慮なくご活用ください。

また、教職員ウェルビーイング調査では、「職場で自分の意見を言いやすい」、「管理者や同僚に相談しやすい」と感じている方ほど、「働きやすさ」だけでなく「働きがい」も高まることが分かりました。日常的な対話を大切に、互いを尊重し合う学校文化を育てていくことこそが、教職員の力を最大限に引き出し、子どもたちの成長につながるものと考えています。「風通しの良い職場づくり」に向け、引き続きご尽力賜りますようお願い申し上げます。

次に、子どもたちのウェルビーイングについて考えてみたいと思います。小学校6年間は、「学んで楽しい」「考えることが好き」「友達と一緒に取り組むと、新しい発見がある」といった、学びや生き方の原点となる経験を重ねる大切な時期です。「考えることはおもしろい」「挑戦してみたい」——そうした前向きな気持ちや、学ぶことへの意欲を育てることが求められています。

昨年度のSASAの結果分析からは、「先生や家の人にほめられる」、「支えられて生きていると感じる」、「失敗もためになると思える」、「自分には良いところがあると思える」児童生徒ほど、「幸せな気持ちになる」ことがよくあることが分かりました。

日頃の学習や学校行事等の中で、子どもたちが「できた」「認められた」「自分は大丈夫だ」と感じられる経験を積み重ねることが、自己肯定感を育み、次の学びへ踏み出す力につながります。子どもたちのウェルビーイングを高めるためにも、本県が進める「ポジティブ教育」に積極的に取り組んでいただきたいと思います。

以上2点申し上げました。皆様と一緒に「子どもたちの未来」のために全力を尽くしてまいります。引き続きのご理解・ご協力を心からお願い申し上げます。

結びになりますが、福井県小学校長会の益々のご発展と、本日お集まりの皆様方のご活躍とご健勝を祈念して、祝辞といたします。本日は誠にありがとうございます。

令和8年度 福井県小学校長会

活動方針

福井県小学校長会は、結成以来、本県の小学校教育の充実・発展のため、真摯に研究と実践を積み重ねるとともに教育諸条件の整備・充実に努め、多大な成果をあげてきた。

現代社会は、急速なデジタル化(Society5.0)やグローバル化が進展する一方、人口減少・少子高齢化や家庭・社会における人間関係の希薄化、貧困問題、さらには、激甚化する自然災害や紛争による価値観の揺らぎといった課題に直面している。この変化の激しい不確実性の時代の中で、「持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」の実現が目指されている。このような中、小学校教育には、正解のない課題に立ち向かい、自立した人間として多様な人々と対話を通して協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り拓いていく力の育成が求められている。本県においても「一人ひとりの個性が輝く、ふくいの未来を担う人づくり」の基本理念のもと、子どもが主役の「夢と希望」「ふくい愛」を育む教育を推し進めていかなければならない。学校は、持続可能な社会の担い手を育成するために、個別最適な学びと協働的な学びにより「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力や人間性等」の3つの力をバランスよく育む教育を実現し、新たな価値を創造し、社会を生き抜く力を身につけた子どもを育てていかなければならない。そのため校長には、明確なビジョンを掲げ、学校組織の活性化を図り、創意ある教育課程の編成・実施・評価・改善に努めることが求められている。また、ふるさとふくいの風土に根付いた教育文化のよいところを継承しつつ、子どもに知的好奇心をもって学びを深める「探究力」、変化に向き合い多様な他者と協働する「共感力」・「対話力」、課題を解決し新たな価値を生み出す「創造力」を育成し、地域と関わり、より深く学び、自らの可能性に挑戦していく「生きる力」の育成を家庭や地域との連携・協働のもとで推し進めていかなければならない。

さらに、令和7年9月に公表された「論点整理」では、次期学習指導要領改訂に向けて、基本方針と『主体的・対話的で深い学び』の実装」「多様性の包摂」「実現可能性の確保」という3つの方向性が示された。これらを支える上で、高度専門職としての教師、教育課程の構造改革・デジタル化・柔軟化等を軸に、学びの質と多様性を両立させるための包括的な取組を推進する必要がある。

学校を取り巻く現状としては、「GIGAスクール構想」の推進、いじめ・不登校への対応、特別支援教育の充実、多様な個性や特性を有する児童の増加、学校教育への信頼を一層高いものにするための教職員の資質・能力の向上、学びの専門職としての「働きやすさ」と「働きがい」の両立など、対応すべき重要課題が山積している。加えて、近年、激甚化している自然災害や、不祥事、

理不尽な要求等へのリスクマネジメントやクライシスマネジメントも求められている。小学校教育の充実・改善を図っていくための、調整授業時数制度の導入等による柔軟な教育課程の編成、少人数学級のより一層の推進や教科担任制の導入による持ち授業時数の縮減、教職員定数の改善や人的措置の充実も喫緊の課題となっている。

校長は、このような状況を深く認識し、教育改革の動向を的確に把握した上で、リーダーシップを発揮し、確かな計画と実行力をもって教育成果をあげていかなければならない。私たちは、組織の総力をあげて課題解決に努めるとともに、積極的に施策提言を進めることで、県民・国民の信頼に応える必要がある。そのために、校長は自らの使命を自覚し、志高く学び続け、権限と責任のもとに、未来社会を創造する力を身につけた日本人の育成を志向して、活力ある学校、信頼に応える学校づくりに努めなければならない。

以上の方針をふまえ、本年度は次の活動を重点として推進する。

本年度の活動の重点

- 1 学校経営の充実
- 2 研究活動の充実
- 3 創意ある教育課程の編成・実施・評価・改善
- 4 教職員の資質・能力の向上
- 5 教職員の定数や処遇の改善、働き方改革の推進

これらの活動を推進するために、東海・北陸地区及び全国連合小学校長会との連携を一層密にして組織活動の充実に努めるとともに、関係諸機関・団体とも連携し、小学校教育に対する正しい世論の喚起に努める。

主な委員会と活動事項

本年度活動方針に基づき、本会の事業遂行のために次の専門委員会及び特別委員会を設置し、事業を推進する。

1 専門委員会

◇人事行財政対策委員会

義務教育費国庫負担制度の堅持、教職員の基礎定数及び加配定数の拡充、ICTを活用した教育の推進のための専門職員の配置促進、教科担任制の導入による教員の持ち時間数の削減、少人数学級の拡大を目指す学級編制基準見直しの促進、退職時の処遇の充実、働き方改革等のための対策・要請活動を行う。

◇調査研究委員会

今日の学校教育の課題や学校経営上の諸問題について調査研究し、対策に資する。

◇教育研究委員会

研究主題を設定し、研究活動の推進および教育研究大会の企画推進を行う。

◇編集広報委員会

「会報」の発行とホームページの更新により、情報の提供、成果の報告等を行う。

2 特別委員会

必要に応じて設置する。

令和8年度

専門委員会活動計画

人事行財政対策委員会

- (要望活動・人対資料)
- 4月22日 ○第1回専門委員会
(第1回小学校人対委員会)
正・副委員長選出、活動方針・内容について協議等
- 4月28日 ○県教委と日程・話題等の連絡調整
- 5月19日 ○県教委との協議
・当日の運営、話題等について
- 6月18日 ○県教委との協議
・当日の話題等について
- 6月下旬 ○各市町人対委員に話題等についてアンケート配付
- 7月中旬 ○各市町人対委員と協議
・話題、提案理由の考察等について
- 8月上旬 ○第1回準備委員会
・当日の運営および提言等の最終協議
- 第2回準備委員会
・話題、提言等について
- 8月26日 ○「ふくい教育ミライ会議」
- 10月29日 ○全連小人事対策研究協議会参加
(委員長)
- 11月下旬 ○「ふくい教育ミライ会議」の報告

調査研究委員会

- (実態調査・調査報告) (全連小調査)
- 4月22日 ○第1回専門委員会
正・副委員長選出
年間事業計画の作成
調査テーマ、内容(項目)について
- 5月上旬 ○調査内容についての会員の希望調査
郡市ごとに希望調査、全体の集計
- 5月19日 ○第2回専門委員会
調査研究項目・内容の決定
調査方法・集計方法について
- 6月上旬 ○各郡市において調査の実施、集計
- 7月中旬 ○各郡市調査研究委員会
担当項目の考察作成
- 8月下旬 ○調査結果の分析、考察検討
調査研究報告書の原稿作成
- 9月上旬 ○原稿検討、調査結果分析、考察
(正・副委員長)
- 10月 ○全連小調査研究協議会参加(委員長)
- 10月下旬 ○報告書のデータ配信(校長会HP)
県教委、地教委等へ報告書配付

- 12月上旬 ○調査研究概要報告
各郡市調査研究委員が概要報告
- 1月中旬 ○本年度活動のまとめ(アンケート)

教育研究委員会

- (研究推進) (全国大会・東陸大会)
- 4月22日 ○第1回専門委員会
正・副委員長選出、年間事業計画作成
東陸福井大会の係等について
- 5月 ○全連小・東陸福井大会参加申込
- 6月4日 ○第2回専門委員会(メールにて確認)
東陸福井大会(原稿校正)について
- 9月18日 ○第3回専門委員会
東陸福井大会当日の運営・係について
- 10月1日 ○全連小北海道大会
13分科会・全体会・講演会
- 10月21日 ○東陸福井大会前日準備(分科会会場)
- 10月22日 ○東陸福井大会
13分科会・全体会・講演会
- 10月末 ○第4回専門委員会(メールにて確認)
東陸大会(分科会報告書提出の連絡)
- 1月中旬 ○第5回専門委員会
東陸福井大会の反省等
令和9年度県大会・東陸富山大会に向けて

編集広報委員会

- (会報発行・HP更新)
- 4月22日 ○第1回専門委員会
正副委員長選出、活動方針
各郡市原稿割当の確認・決定等
「会報」編集計画
- 5月上旬 ○「会報」123号原稿依頼
県教委・会長・「教育最新事情」執筆者・校長講話執筆者への依頼
- 6月 ○HP更新①
- 6月30日 ○全連小広報担当者連絡協議会
(委員長)
- 7月9日 ○一次校正締切
- 7月31日 ○第1回編集企画会議(正副委員長)
二次校正・編集作業
- 8月4日 ○第2回専門委員会
「会報」124号企画・原稿依頼計画
- 8月31日 ○「会報」123号発行
- 9月上旬 ○「会報」124号原稿依頼
○HP更新②
- 11月12日 ○一次校正締切
- 12月17日 ○第2回編集企画会議(正副委員長)
二次校正・編集作業
- 1月7日 ○第3回専門委員会
- 1月12日 ○「会報」124号発行
- 2月 ○HP更新③

校 長 講 話

楽しむ力を育む 美山小学校

〈福井市〉美山小学校長
奥 田 幸 雄

〔開校式 学校長挨拶から〕

かつて、1955年 昭和30年に、足羽郡の下宇坂、上宇坂と大野郡の芦見、羽生、上味見、下味見村が郡境を超えて合併を果たし、美山村が誕生しました。記録によると、足羽川の清流に映える豊かな緑、四季折々にあざやかな変化を示す美しい自然。これらを誇りとして、「美しい山々 美山村」と名付けられたそうです。時代が巡り、福井市となった現在もあらゆる品物や団体名に「美山」という名が見られます。6つの地区の結びつきの強さ、美山地区に対する愛着、誇りを感じます。いよいよ小学校も1つになりました。校名は住民の皆様の総意で「美山小学校」と名付けられました。

私がこれから特に大切にしていきたいと考えているのは、次の三つの学びです。

1. ふるさと「美山」の自然を愛し、美山にかかわる人々といっしょにつくりあげる学び
2. 子どもたちにとって、思い出に残る、将来にわたって力になる学び
3. 年齢や個性のちがいをのりこえて、ともに楽しむ力を育むことができる学び であります。

本日から、全校児童85名でスタートしていきます。

児童の皆さん、みんな仲良く、楽しく学校生活ができるようにがんばっていきましょう。

〔始業式 校長の話から〕

あらためて おはようございます。やはり、児童数が増えたので声が大きく響きますね。

皆さんはこの新しい小学校の伝統を最初につくっていく児童になります。校長先生が今日皆さんに伝えたいことは、1つ「楽しい学校をみんなでつくりましょう」です。先生方や仲間と共にこれからつくっていきます。

では、自分にとっても周りの人にとっても楽しい学校はどうすればできるのでしょうか。自分は何もしないで、だれかが自分を楽しませてくれるのでしょうか？

校長先生が皆さんに期待していることは、自分から動くことです。

自分から 元気に挨拶をしましょう。

自分から 仲間や先生のお話をしっかり聞きましょう。

自分から 授業やその他の活動に参加しましょう。

自分から 仲間と協力しましょう。

自分から 仲間や先生のやさしさに感謝しましょう。

自分から動くことで、自分にとっても周りの人にとっても楽しい学校、福井県で一番のいや日本で一番の楽しい学校をみんなでつくっていきましょう。

ジャンプ!&ジャンプ!!
～集会の話から～〈勝山市〉村岡小学校長
本 田 秋 美

「蚤」について知っていることはありますか？そう、猫や犬にくっつく2mmくらいの小さな生き物です。しかし、すごいパワーをもっていて、ジャンプ力は、2mとされています。自分の体の千倍の高さまでジャンプできるのです。人間で例えると、身長150cmの人が1500mジャンプできるということです。山もひとつ飛びです。

では、そんなジャンプ力をもっている蚤を高さ50cmのビーカーに入れて蓋をします。蚤はすごいジャンプ力でジャンプします。すると、蓋にぶつかりますよね。これを繰り返していくと、蚤は学習して、ぶつからない程度に飛び始めます。では、問題です。ぶつからないように跳ぶようになった頃、ビーカーの蓋を外すとどうなるでしょう？そう、蚤は50cmしか跳べなくなります。蓋がないのに。本当はもっともっと高く跳べるのにです。人間にも同じ事が言えます。いつも「これくらいいいや。」と手を抜いていると、そこまでしか力が出なくなります。本当はもっともっと力があるのに、です。もったいないと思いませんか？

絵本『かべのおこうになにがある？』（BL出版 ブリッタ・テッケントラップ作）を紹介します。

『おおきなあかいかべがありました。いつからなのか どうしてなのか だれもしりませんでした。ちいさいねずみはおもいました。「かべのおこうになにがあるんだろう？」』知りたがりの小さなねずみは、みんなに聞いて回ります。こわがりのねこは「かべはわたしたちをまもってくれてるのよ。そとはこわいものがいっぱいだから。」と言います。くまのおじいさんも、おちょうしものきつねも、くたびれたライオンも小さなねずみが納得のいく答えをくれません。それでもねずみはあきらめませんでした。ある日、壁の上からそらいろのとりが飛んできて小さなねずみは頼みます。「とりさん、あなたのせかいへつれてって。わたし、かべのおこうがみたいの。」ねずみととりは壁を飛び越えました。そこはたくさんの色のあふれる夢のような世界でした。ねずみはつぶやきました。「かべのそとはくらくてこわいせかいだとおもってた。だって、みんながそういっていたもの。」「こわいとおもうからこわいものがみえるんだ。」とりはそう言いました。「ゆうきがあればほんとうのものがみえる。いきていればたくさんのかべにであうものさ。でもそのほとんどはただのまぼろしだ。ほんとうのものをみるゆうきがあればかべはきえる。ぜんぶきえたあとにはきっとすばらしいせかいがあるはずだよ。」

どうか、自分で自分の力に蓋をすることなく、あなたの力を存分に発揮してってください。おそれず、なりたい自分に向かってチャレンジしてください。

sense of wonder ～不思議さを感じ取る感性～

〈敦賀市〉栗野南小学校長
北川 佳邦

今日は、みなさんに大切にしてほしい「センス オブ ワンダー」についてお話します。途中、難しい内容もありますが、頑張って聴いてください。

では、さっそく質問です。「今年の干支は何でしょう。」

干支は、十干（じっかん）と十二支（じゅうにし）の組み合わせからできています。

十干とは、甲（きのえ）から始まり、癸（みずのと）で終わる10までの数をあらわす漢字です。子（ね）から始まる十二支は、よく耳にしますね。

十干と十二支を組み合わせると、60の組み合わせができます。この干支は、私たちの身近なところにもあります。例えば、「甲（きのえ）子（ね）」ですが、何かひらめきませんか。

そうです。甲子園球場です。甲子園の完成は、1924（大正13）年8月1日で、干支でいうならば「甲子（きのえね）」の年にあたります。

それでは、「壬（みずのえ）申（さる）」はどうでしょうか。社会科の歴史好きな人ならわかるかもしれませんね。そうです壬申の乱ですね。壬申の年（672年）に起きた内乱が「壬申の乱」ですね。

このように、干支はいろいろなところで顔を出します。それでは、みなさんの干支は何でしょう。（それぞれの学年の干支を読み上げる）

次にみなさんの干支がやってくるのは、生まれてから60年後ということになります。今でも、干支がひとめぐりする60歳を「還暦」といい、お祝いする風習もあります。十二支の「12」という数で思いつくことはありませんか。（以下スライドを示しながら）

そうですね、まず1年間が12ヶ月ですね。

時計も1時から12時までですね。

星座も12星座ありますね。

ピアノの音階も「ド」から「シ」まで12音階ありますね。

テレビのリモコンボタンも、ドーナッツのひと箱の数も12ですよ。

英語の数え方も、12までは、それぞれの読み方がありますが、13からは「何とかティーン」ですよ。

「12」という数は、私たちの身の回りにたくさんありますね。

みなさんも、この「何でだろう」「ふしぎだな」というひらめきを、大切にしてくださいね。

校章に込められた願い

〈大飯郡〉内浦小中学校長
松井 昭男

私たちの学校のシンボルである「内浦小中学校の校章」についてのお話をします。体育館のステージにあるマークです。みなさんは、この内浦小中学校の校章の意味を知っていますか。中には、おうちの人に聞いたことがあるという人もいるかもしれません。今一度、この校章をじっくりと見てください。何かの形などが見えてきませんか。真ん中にある文字は、分かりますか。私たちのふるさと「内浦」の「内」という文字です。では、その周りにあるものの形は何に見えますか。そうです。これは「木の葉」ですね。よく見ると大きな木の葉が3枚、組み合わさっています。実は、この3枚の葉っぱには、とても大切な歴史が隠されているのです。

今から80年ほど前、日本では、新しく中学校が作られることになりました。そのときに、この地域にも、新しい中学校が誕生しました。これが今の「内浦小中学校」の始まりです。この新しい中学校ができるときに、この校章のデザインが考えられました。当時、この内浦の地域には、「日引小学校」「神野小学校」「内浦小学校」という、三つの小学校がありました。新しくできた中学校には、この三つの小学校を卒業したお兄さんやお姉さんたちが、集まって一緒に勉強することになったのです。ですから、この3枚の木葉は、その三つの小学校の輝かしい歴史を表しています。さらに、もう一つ隠されているものがあります。校章の一番下の部分を、よく見てください。山のような形が見えませんか。これは、私たちのふるさとの誇りである、美しい「青葉山」の形を表しているのです。



つまり、この校章には、「青葉山のもとで、三つの学校から集まったみんながしっかりと手を取り合い、みんなで心をつなげて、未来へと進歩し、発展していこう」という願いが込められているのです。

みなさんは一人一人、それぞれの良さを持っています。得意なことも、好きなこともそれぞれ違います。それは、かつての三つの学校がそれぞれ素敵な個性を持っていたのと同じです。大事なことは、その個性をバラバラにするのではなく、この校章の葉っぱのように、ぎゅっと一つに合わせることです。3枚の葉がぴったりと寄り添うことで一つの美しい形を作るように、みんなの個性が合わさるからこそ、この学校にしかない大きな力が生まれます。友達が困っているときは、私たちのまちをいつでも優しく見守ってくれている青葉山のようにどっしりと構え、優しく支え合う。新しいことに挑戦するときは、これから大きく育っていく元気な葉っぱのように、みんなが互いに励まし高め合う。そのように力を合わせ、誰もが楽しく、笑顔あふれる学校をつくっていきましょう。

教育最新事情

直接話す、まずやってみる、二項対立から脱却する

文部科学省大臣官房総務課大臣政務官秘書官 弟子丸 知 樹 氏



※本稿に記載した内容は所属組織の見解ではなく、全て個人の見解です。

文部科学省の弟子丸と申します。この度は貴重な機会をいただき誠にありがとうございます。私は平成5年生まれの敦賀市出身で栗野小学校、栗野中学校で学び、兄の影響で高志高校に通いました。小中学校では先生方から教えていただいた「凡事徹底」が印象深く、高校には敦賀から片道50分の電車通学で、野球部の朝練のため福井駅から歩いた足跡の無い雪道や、車窓から見る夕焼けを今でも思い出します。

平成30年に文部科学省に入省し、教育DX担当としてCBTシステムであるMEXCBT(メクビット)の構築などに携わった後、人口およそ300人の離島である東京都利島村(としまむら)に出向し教育長を2年間務めました。文部科学省に戻って学校施設の担当をした後、少しだけデジタル教科書を担当し、昨年秋の高市政権の発足に伴い今は大臣政務官の秘書官という仕事をしています。

潜越ながら「教育最新事情」というテーマをいただきましたので、利島で学んだことも交えつつ、私がこれまで担当していた分野の中から、①GIGAスクール構想、②CBT、③デジタル教科書の3つについて、私見(※)を書かせていただきます。

1. 離島で学んだこと

【直接話す】「教育の原点」と言われる離島への出向経験の中で、学校は所在する地域と一体不可分だと感じました。人口およそ300人の利島では、子供たちがどう育ち、大人たちがどう生きるかが島の将来に直結するため、「人づくりが島づくり」だと考え、様々な取組を行いました。例えば、島内に高校が無いため、義務教育段階の子供たちの「自立」をいかに支えるかという観点で教職員・保護者・地域住民が話し合っ教育に関する方針を定めました。また、いわゆる「都会っ子」の東京都の先生方にとって離島赴任がより魅力的になるよう、「教師が育つ島」というビジョンを掲げて研修等の支援体制を充実させました。運動会のような行事を大切に、島民およそ200名が集まる一大イベントになっています。

取組を進める際には、各々の立場によって異なる「正義」を理解し合うため、多くの人と直接お話しさせていただきました。小離島の良さを生かし、時にはご自宅を

訪ねていきました。誰かを間に挟むことなく直接話すことで、「あっ、目指すところは同じかもしれない」と共通項が見えてくると感じました。

【まずやってみる】現代社会は、不確かかつ大量の情報が氾濫し、新たな挑戦が「どうせうまくいかない」と冷笑されやすい時代だと感じます。一方で、生成AIがかなりの精度で「評論」する中で、人間が「行動し、やってみること」の価値は増しているように感じます。外側から反対意見のみを言ったり、内部にしながら傍観的なコメントに終始したりするよりは、泥臭く「まずやってみる」ことを大切にしていきたいです。

子供たちと一緒に楽しむ視点も重要だと感じます。利島への赴任期間中、5人学級だからこそこできる「英語好きになる授業」を実現した先生や、授業や給食時間に他島の学校とオンラインで接続し「同級生」を増やすことを模索する先生、小さな校庭を活かしてソフトボールの授業中に場外ホームランをねらう先生など、島の特性を生かして先生自身が楽しんでいる素敵な実践がたくさんありました。小さな成功や失敗を繰り返しながら、楽しそうにチャレンジを続ける先生に、多くの子供たちや保護者、地域住民は心を動かされており、島全体が明るくなる気がしました。

【二項対立から脱却する】社会の変化とともに地域の状況は変わり、未来を生きる子供たちに必要な教育も変化します。時には「昔の方が良かった」と思うこともあるかもしれません。その際に重要なのは「二項対立から脱却すること」だと考えます。

「令和答申」と呼ばれる令和3年1月の中央教育審議会の答申(「令和の日本型学校教育」の構築を目指して)では下記のように記載されています。

~~~~~

一斉授業か個別学習か、履修主義か修得主義か、デジタルかアナログか、遠隔・オンラインか、対面・オフラインかといった、いわゆる「二項対立」の陥穽に陥らないことに留意すべきである。どちらかだけを選ぶのではなく、教育の質の向上のために、発達の段階や学習場面等により、どちらの良さも適切に組み合わせる生かしていくという考え方に立つべきである。

~~~~~

AかBかではなく、「AとBのいいとこ取り」を模索することが重要になります。

2. GIGAスクール構想による端末の活用

前置きが長くなりましたが、スマートフォンやSNSの普及により子供時代の在り方が変容し、心の健康に影響が出ているという指摘もある中、子供たちが学校で情報技術の理解や活用方法、そして適切な取扱いを学ぶ必要があります。

「ICT活用は目的ではなく手段」ですが、「だから使う必要はない」と考えるのではなく、「どう使えばより良い授業になるか」を試行錯誤することが重要です。「自分の教科では使いにくい」とならないように、文部科学省では、「StuDX Style」という特設サイトで学校種や教科別の活用事例を掲載しています。

3. CBT (Computer Based Testing) の時代

調査やテストのCBT化も進んでいます。全国学力・学習状況調査も、令和9年度からは全ての教科で文部科学省CBTシステム(MEXCBT)を活用して実施される予定です。

これまで通りのやり方で、これまで通りの力を測定するなら紙のままで良いのかもしれませんが、これまでできなかったことをできるようにする力がCBTにはあると考えています。一覽性の観点から、国語の調査問題の問題文は紙でも一部配布するなど、紙とデジタルを組み合わせることも考えられます。

CBT化が更に進めば、例えば、シミュレーションを活用した問題を出題することで、従来測ることが難しいとされてきた思考力や問題解決力も測定することが可能になります。解答時の操作ログから試行錯誤の様子が分かり、一生懸命問題を解こうとした子供の様子も分かるようになります。

また、教育心理学で望ましいとされる「即時フィードバック」も可能となります。スポーツと同じで、フィードバックは早いほど忘れないうちに改善できます。自動採点の活用による先生方の負担軽減の効果も大きいです。記述式問題の自動採点も研究が進んでいます。昨今の生成AIの進歩により、実現する日も近づいているでしょう。

4. デジタルな形態も含む新しい教科書

本年6月、国会で学校教育法等が改正され、これまで紙だけが認められていた教科書にデジタルの良さを取り入れることが可能となり、新しい学習指導要領の実施に合わせてデジタルな形態を含む新たな教科書を使用できるようになります。動画・音声等のデジタルコンテンツを教科書の一部として掲載することが可能となり、それ

らは教科書検定の対象となることで質の保証も実現されます。

「紙の方が読みやすい」とおっしゃる方もいるでしょう。ただ、私も様々な論文等を勉強しましたが、結局はケースバイケースなのと、「慣れ」の影響が大きいという説が有力です。諸外国では紙回帰が起きているという指摘もありますがミスリードであり、文部科学省ではFAQを掲載しています。

自分がそう思う「から」紙の方が良いと考えるより、自分がそう思う「なら」デジタルの方が良い人や場面もあるのではないかと考えることも必要です。

例えば、算数で空間がイメージできずに苦手意識がついたり、英単語の発音が分からなくて恥ずかしかったり、理科で実験の手順を聞きそびれてしまったり、そうした「困り感」も解消でき、学習意欲が上がる子供たちが必ずいるはずです。特別な支援が必要な子供たちにとってのもより良い教科書になるはずです。

5. 不易と流行

前半でご紹介した「直接話す、まずやってみる、二項対立から脱却する」は、これまでもこれからも時代に関わらず重要になるはずです。

その上で、後半にご紹介したような現代で使える知見や技術を組み合わせることで、福井の子供たちは困難な時代でも健やかに生き抜いてくれ、我々と一緒に未来を紡いでくれるのだと思います。

(参考サイト)

- ・「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)(中教審第228号)
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00002.htm
- ・StuDX Style
<https://www.mext.go.jp/studxstyle/index.html>
- ・文部科学省CBTシステム
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/mext_00001.html
- ・【よくある質問】デジタルな形態も含む新たな教科書について
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/seido/mext_03511.html

(参考文献)

- ・弟子丸知樹 編著
「島の教育 一制約を強みに変え、絶好の学びの環境を生かす」 東洋館出版、令和8年8月

編集 後記

「会報」123号では、「教育最新事情」という新たな企画を立ち上げました。記念すべき第1回は、敦賀市出身で、2022年から2年間、東京都利島村の教育長を務められ、現在は文部科学省で政務官秘書官をされている弟子丸知樹氏に執筆をお願いしました。変化の激しい時代の中で、利島村での教育実践やご自身の経験を踏まえながら、これからの学校教育の在り方や、私たち校長が大切にすべきことについて、示唆に富む内容をご寄稿くださいました。また、ご多用の中、貴重な原稿をお寄せいただいた皆様方に、心より感謝申し上げます。「会報」や県小学校長会のホームページが、会員の皆様にとって新たな気付きや学びにつながり、今後の学校経営の一助となれば幸いです。

